



発行所
社団法人 国民文化研究会
(九州↔東京↔全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

「五十周年記念の集い」開かる！ 理事長式辞「ともに祖国に生きる喜びを…」

—平成十七年十一月五日、記念式典を挙行—

去る十一月五日(土)、午後一時から学士会館(東京都千代田区)に於いて、本会五十年の歩みを回顧し前進を期する「社団法人国民文化研究会五十周年記念の集い」が、多数の御来賓、御賛助者、物故恩師の御遺族をお迎へし、また北は青森・秋田から南は九州まで全国各地からの正会員の参集を得て挙

行された(参加者二百四十九名)。次いで壇上に立った上村和男理事長は式辞の中で、自ら学生として参加した昭和三十一年の霧島での「第一回」合宿教室を振り返りながら、村寅二郎前理事長を中心とする本会創始者達の祖国防護の苦闘を顧み、「祖国を自分の心中に芽生えさせ、そして愛し、友の心を偲び合ひ、ともに祖国に生きる喜びを胸に生き抜かうではないか」と述べた。御来賓の小堀桂一郎東京大学名誉教授からは「冷戦終結後、所謂保守が変な方向に改革しようとしてゐる。日本の真性なる伝統を守護する努力の手を少しも緩めるわけには行かない。私も出来る限りのお手伝いをしたい」との祝辞を頂戴した。

を導き下さいました諸先生・諸先輩のみ霊に一分間の黙祷を捧げます」との進行の言葉に合はせて、感謝の祈りを捧げた。

続いて日本学生協会時代から歌ひ継いできた三井甲之作詞・信時潔作曲の式典曲「神洲不滅」を斉唱し、坂東一男常務理事の発声で一同声高らかに聖寿の万歳を三唱して式典を終了した。

五十周年記念式典は磯貝保博副理事長の進行により執り行はれ、初めに国歌君が代を斉唱し、続いて「本会の源流であります旧制第一高等学校瑞穂会、昭信会並びに日本学生協会、戦後の国民文化研究会を支へお導き下さいました諸先生・諸先輩のみ霊に一分間の黙祷を捧げます」との進行の言葉に合はせて、感謝の祈りを捧げた。

暫時休憩の後、記念シンポジウムに移り、冒頭で今林賢郁副理事長が小堀桂一郎先生、拓殖大学日本文化研究所長井尻千男先生、埼玉大学教授長谷川三千子先生のパネリスト(お三人とも本会顧問)、そして司会の小田村四郎会長(前拓殖大学総長)を紹介。「皇室と国民」をテーマに別掲(四・五頁に要旨掲載)のやうな歴史的事実を踏まへた高い見識が披露され聴講者に深い感銘を与へた。

「集い」は第一部(五十周年記念式典及び記念シンポジウム)と第二部(祝賀会)から成り、参加者一同は「国文研五十年の歴史」に思ひを新たにしました。

「国文研は我々の帰るべき悠久の祖国の生命を受け継ぎ守るために生れた」との旨の寶邊正久副会長の開会挨拶の後、長内俊平副会長の音頭で乾杯。中川昭一農林水産大臣をはじめ御来賓の皆様から相次いで祝辞を戴いた。またあり方についての日頃の所懐を語り合ふ姿が見られた。

「集い」は第一部(五十周年記念式典及び記念シンポジウム)と第二部(祝賀会)から成り、参加者一同は「国文研五十年の歴史」に思ひを新たにしました。

しばし懇談の後、来夏の第五十一回合宿教室の運営委員長を務める藤新成信理事が「第一回と同じ霧島での開催となるが国文研の原点を再確認しつつ準備したい」と決意を込めて挨拶し、学生リーダー小柳雄平(明大)・林祥人(九工大)兩名の音頭で日本学生協会時代から歌はれてきた行進曲「進めこのみち」を斉唱して、さらなる前進を誓ひ合つた。閉会挨拶で小柳太陽副会長は「国民同胞」創刊号(昭和三十六年十一月号)の巻頭言(小田村前理事長の筆による)を掲げつつ「本日を国文研の新たな旅立ちの日としよう」と述べ、盛んな拍手の裡に午後六時前、閉会した。

「集い」は第一部(五十周年記念式典及び記念シンポジウム)と第二部(祝賀会)から成り、参加者一同は「国文研五十年の歴史」に思ひを新たにしました。

「国文研は我々の帰るべき悠久の祖国の生命を受け継ぎ守るために生れた」との旨の寶邊正久副会長の開会挨拶の後、長内俊平副会長の音頭で乾杯。中川昭一農林水産大臣をはじめ御来賓の皆様から相次いで祝辞を戴いた。またあり方についての日頃の所懐を語り合ふ姿が見られた。

「集い」は第一部(五十周年記念式典及び記念シンポジウム)と第二部(祝賀会)から成り、参加者一同は「国文研五十年の歴史」に思ひを新たにしました。

「国文研は我々の帰るべき悠久の祖国の生命を受け継ぎ守るために生れた」との旨の寶邊正久副会長の開会挨拶の後、長内俊平副会長の音頭で乾杯。中川昭一農林水産大臣をはじめ御来賓の皆様から相次いで祝辞を戴いた。またあり方についての日頃の所懐を語り合ふ姿が見られた。

「集い」は第一部(五十周年記念式典及び記念シンポジウム)と第二部(祝賀会)から成り、参加者一同は「国文研五十年の歴史」に思ひを新たにしました。

「国文研は我々の帰るべき悠久の祖国の生命を受け継ぎ守るために生れた」との旨の寶邊正久副会長の開会挨拶の後、長内俊平副会長の音頭で乾杯。中川昭一農林水産大臣をはじめ御来賓の皆様から相次いで祝辞を戴いた。またあり方についての日頃の所懐を語り合ふ姿が見られた。

「集い」は第一部(五十周年記念式典及び記念シンポジウム)と第二部(祝賀会)から成り、参加者一同は「国文研五十年の歴史」に思ひを新たにしました。

「国文研は我々の帰るべき悠久の祖国の生命を受け継ぎ守るために生れた」との旨の寶邊正久副会長の開会挨拶の後、長内俊平副会長の音頭で乾杯。中川昭一農林水産大臣をはじめ御来賓の皆様から相次いで祝辞を戴いた。またあり方についての日頃の所懐を語り合ふ姿が見られた。



(社)国民文化研究会「五十周年記念の集い」